

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 1996/2 第5号

人里に心なごむ自然環境を取り戻そう

—第4回「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム開催される—

私たちはどのようにすれば、ホテルのような身近な生き物たちと共存出来る環境の保全と再生をはかれるのか。恒例となった日本ホテルの会主催による「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムが、平成7年10月13日、福岡明治生命ホール（福岡市）で開催された。4回目となったシンポジウムのテーマは、「人里に心なごむ自然環境を取り戻そう」。シンポジウムでは、人里に代表される二次的自然環境に様々な角度からスポットを当て、「保存・再生すべき自然環境、身近な生き物たちとの共存による豊かな人里環境像」を浮かび上がらせた。今回は初めての九州開催にも関わらず、環境問題に関心の深い市民や学生、研究者、また実際に自然環境の保全や再生に携わっている行



政や企業関係者等約300名が全国から参加し活況なシンポジウムとなった。なお、次回のシンポジウムは3年ぶりに舞台を東京に移して開催される予定である。

シンポジウムの概要

農林水産省 野菜茶業試験場 佐藤 安志

挨拶に引き続き、日高敏隆（滋賀県立大学学長）会長が、「人里は心和む自然。そこからは自然の論理も学べる。豊かな人里をつくるには、人間の論理の無理押しだけではなく、自然の論理をある程度許容することが必要。」と基調講演を行った。その後、地元団体における人里再生運動の事例報告が行われた。北九州では、住民運動が行政当局を動かし、ヘドロと雑排水で死の川となった小熊野川を、緑に覆われ鳥もホ

タルも飛び交い、魚も生息する豊かな小川へ再生させた（尾崎善義氏）。福岡市では、市民による地道で多様な河川愛護活動が現在行われている。役所やボランティア、小・中学校等の協力による各種観察会や地域活動を通した「自然と触れ合える」環境整備への取り組みに繋がっている（楠原吉晴氏）。

続いて関連省庁の環境保全に関する取り組みが報告された。この中で、「河川の持つ豊かな生

態系や地域の風土を育むという役割を、これまでの人命や財産を守という役割と同様に重視し、河川環境の保全と創造に係る施策を行ってゆく」という建設省、「水資源の涵養や緑豊かな景観、多様な生態系の保全、自然とのふれあい等、農業の持つ多面的な公益機能を重視し、里山～水田・農地～集落へと連なる農村地域における多様性豊かな自然環境の保全のための取り組みを展開してゆく」という農林水産省の見解が示された。また環境庁からは「絶滅のおそれのある野性動植物の種の保存に関する法律」に基づく「国内希少野性動植物」や「緊急指定種」の指定や今後必要に応じて行われる生息地の保護・改善等に関する施策についての説明が行われた。

昆虫写真家の栗林慧氏は、美しいスライドを交えて「人里の昆虫を撮る」と題した特別講演を行い「素晴らしい写真を通して、身近にある自然がいかに生き生きと生命に満ち溢れているかを伝えたい。それが私の使命であり、写真は私が自然の大切さを訴える唯一の手段である」と

語った。

また、大場信義（横須賀市自然博物館）氏は、スライドショーの中で、「種の保存法」に基づいて「緊急指定種」に指定されたクメジマボタル、イリオモテボタルを中心に南西諸島の人里に生息する様々なボタルをクローズアップし、「人里環境をもう一度見直し、地域固有の生息環境を可能なかぎり保全・再生することの重要性」を強調した。その後、具体例も含めた幅広い質疑が活発に行われた。最後に矢島稔（財東京動物園協会）副会長が、「心和む人里環境に決まった型はない。豊かな人里を創造・保全してゆくためには、皆さんがそれぞれの地域で、それぞれの立場で考え行動してゆくことが結果的に近道となる。日本ボタルの会は、これからも心和む豊かな人里環境の保全・再生に向けた活動を展開するため、皆さんと共に考え、行動します」とまとめた。

（今回のシンポジウムの詳細は、機関誌「ボタルと人里」第4号に掲載致します。）

湿地のトンボ <サラサヤンマ>

東京農業大学昆虫学研究室 川島 逸郎

サラサヤンマは、ヤンマとしては小型であり、黒地に黄緑色の斑紋をちりばめた美しいトンボです。あまり多くはなく発見しにくいいためか、これまで特に幼虫期の生態は不明なままでしたので、私は地元の三浦半島を調査対象地にしてサラサヤンマの生態解明に努めてきました。一般に成虫は5～6月に低湿地に出現し、雄は2～3平方メートル位のごく小さな縄張りを持ち、産卵にやって来る雌を待ちます。雌は約20～30分の交尾後すぐに産卵に移りますが、不思議なことに水気の多い場所を避け、林床の朽木や土中などに好んで産卵するのです。幼虫は飼育下では14齢期を経て、なんと4年間もかけて成長しますが、この期間は乾燥には弱いことが確認されています。卵期も水中で正常に発生す

るので、なぜそのような産卵場所を選び、幼虫が水域に入るのかといったことなどは未だに分かっていません。幼虫は形態的にも特殊な点が多く、触角が著しく発達する一方で眼が退化するなど、他のヤンマのヤゴとは全く異なっており、こうした点も他の種とは異なった生活を送っていると思われます。

本種は生息地や分布状況からみると、むしろ人里のトンボといってもよいと思いますが、最近西表島で発見されたイリオモテボタルと同じように、身近な生き物でもまだまだ多くの知られていない世界が潜んでいることの一例といえましょう。私がこのトンボに興味を持ってから8年が過ぎましたが、その間どの生息地も急速に消滅または減少し、最近では野外調査も非常

に困難になってきています。生息地である低湿地は、きわめて微妙なバランスの上に成り立っている水系環境であることは経験的には十分予想できますが、それも具体的にはほとんど分かっていません。本種の生息地の状況や生態は各地で微妙に異なるようですが、それらを明らかにして比較することにより、低湿地という環境そのものを理解することが可能になると思います。湿地という一つの水系環境全体をみつめる窓口ともなるこの愛らしいヤンマが、未知の点を残したまま私たちの周りから消えてしまうことのないようにしていきたいものです。



サラヤンマ

沖縄ホタル通信（その1） 黒島紀行

琉球大学農学部 豊口 敬

黒島は石垣島の南西約17kmに位置する隆起サンゴ礁によりできた島であり、島内には約2000頭近い黒島牛が放牧されていて大変のどかな島です。島の中心地東筋にはサンゴを積み上げた石垣の立ち並ぶ独特の美しい街並みが広がり、日本の道100選にも選ばれています。またこの島はダイビングのメッカでもあります。

私は1995年12月28日に、ホタル調査が目的で後藤好正氏、川島逸郎氏とともにこの島を来訪しました。島は自転車で30分程で周れる位の大きさであり、人間より牛（水牛・黒島牛）の方をよく目撃します。隆起サンゴの島ということもあり、あちらこちらに石灰岩がゴロゴロしており、また島のほとんどが放牧地であり、林は島に10数ヶ所ある御獄周辺くらいにしか残っていません。植生は貧弱であり、林床は乾燥しています。果たしてこの島にはどんなホタルがいるのだろうか？胸躍る気分で自転車をひたすら走らせていますと、放牧地の道上を1匹のホタルが飛んでいる。近づいてみるとオオシママドボタルの雄成虫でした。道ばたに生えている草をよく見ると触角をV字状にし、いわゆる雌のフェロモンを探している雄の成虫がところどころに止まっていました。しばらく自転車を走

らせると林と林の間の舗装路上につぶされているオオシママドボタルの雄成虫がいました。よく見るとあちらこちらにそのような個体があります。今さらに路上にでてきて歩いている呑気なホタルもいました。多分、車がほとんど走らない島内で、観光客が利用する自転車あるいは牛に踏まれたのかもしれませんが、なぜ路上にでてきて歩いているのか分かりませんが、まるでホタルがこの島では交通手段はいらない（健康のために歩きなさい）と訴えているようにみえました。夜になると放牧地の中や道路脇で静止して発光しているオオシママドボタルの雄成虫がいました。放牧地の上を低空飛行している個体もありました。その姿はまるでゲンジボタルのようでひじょうに美しい情景でした（但し点滅しないので区別できる）。また、雌の成虫がいないかと地上を注意深く見ましたが発見できませんでした。本属のホタルの雌成虫は、翅が退化していて飛ぶことができないので見つけることは極めて難しいのです。その姿をぜひ野外で見たいと思っていたので残念でした。

今回の旅で確認できたことは、この島にはオオシママドボタルしかいないということでありました。しかも幼虫（シャクトリムシみたいに

歩く)がいなかったので、この季節は卵と成虫なのでしょう。民宿の貼り紙にホタルの発生期が記されており、9月末から1月初と書いてありました。これらのことから考えて多分、この時期は黒島でのオオシママドボタルの発生後期なのだろうと思われます。また石垣島と西表島に棲息するオオシママドボタル以外のホタルが、中間に位置する黒島には全然見られません

でした。なぜ他のホタルがいらないのか？多分、隆起サンゴ礁の平坦な島で全体的に乾燥していて、森林が少ないためと考えられます。しかしどうしてオオシママドボタルは、離島に分布し拡散していったのであろうか、たいへん興味深い問題であります。

最後にこの島は酒は御法度の島らしいので禁酒をしたい方がいればぜひ来訪してください。

共食いするホタル

東京都立大学理学部 鈴木 浩文

ホタルの幼虫は貝を食べて成長し、成虫になると何も食べないと考えられていますが、沖縄のクシヒゲボタルやイリオモテボタルの幼虫はミミズやヤスデを食べています。しかし世の中には変わったホタルがいて、成虫が同じホタルを食べてしまうというのです。私がこのホタルに出会ったのは中米のベリーズという国の道路沿いの湿ったところでした。このホタルの発光はゲンジボタルとは違って尾を引かないフラッシュ光で、飛びながら発光しますがすぐ光を消してしまいます。ですから網で捕まえようとしてもなかなか採れませんでした。それでも捕まえた数匹を1つのビンに入れて宿に帰りました。次の日ビンを開けてみると、何匹かのホタルの体がバラバラになっていました。たぶん食べられて。帰国後このホタルについて調べて

みたところ、これは北米から中米にかけて生息しているフォツウリス属のホタルでした。さらに変わったことに、このホタルの雌は別の種類のホタルの発光パターンをまねして、その種の雄を呼び寄せて食べてしまうというのです。私は実際にホタルがホタルを食べているところはみられませんでした。このような変わった生態をもったホタルがごく普通の道端にたくさんいました。

熱帯には我々の常識では思いもつかないような変わった生き物がたくさんいますが、最近中米や東南アジアではそれらが生息している熱帯雨林が何のコントロールもなしにものすごい勢いで失われています。気がついたら何もいなくなっていたということのないようにしたいものです。



フォツウリス属の一種



食べられたホタルの残骸

日本ホテルの会指導者研修会

日 時 1996年3月7日(木) 13:00~16:00
場 所 神奈川県横須賀市岩戸町内会館
目 的 ホテルを通した都市河川の保全と再生へ向けて、具体的な再生方法を理論と実践を通して論議し考える。併せて現地見学し、今後の指針とする。
対 象 日本ホテルの会会員
応募人数 50名
応募方法 往復はがきにて3月1日(消印有効)までに日本ホテルの会事務局に住所・氏名・連絡先電話番号を記して申し込んで下さい。

〒105 東京都渋谷区桜丘町12-8 渋谷コーポラス401
TEL 03-3463-9061

参加費 資料代 1000円

日 程 3月7日(木) 13:00~16:00

研修・講義

1. 身近な自然—小さいきものとの触れあい(矢島 稔)
2. 生物からみた岩戸川の再生の経過と変遷
3. 水質からみた河川環境
4. 質疑応答
5. 現地見学(岩戸川を見学します)

横須賀ホテルの会による案内・説明

終了予定 16:00 現地解散

人里の水辺に関する特別展示のご案内

特別展示 「三浦半島の水辺—身近な生物と私たちの暮らし—」

開催期間 1996年3月2日(土)~4月7日(日)

場 所 横須賀市自然・人文博物館特別展示室

主 催 横須賀市自然博物館

特別展示のねらい

田んぼ・小川や池などの水辺とそのまわりの雑木林にはたくさんの動物と植物が棲み、そこは自然と人が共に生活する人里です。このような水辺を中心とした人里は、私たちにうるおいとやすらぎを与え、いろいろな生き物に接することができる楽しい場所でもあります。残念ながら、このような水辺はしだいに少なくなり、水辺で遊んだり、くつろいだりした経験は三浦半島でも昔の話になりつつあります。

この展示では三浦半島の水源地から川を下り、田んぼや池を巡り、河口の干潟や海岸まで様々な水辺をたどりながらそこに生活する生き物の様子を紹介します。残された水辺をどのように守るの

か、あるいは破壊された水辺をどのようにもどしたらよいのか、水辺と人の望ましい関わり方を考えていただく機会にさせていただきたいと思います。

特別期間中には以下の講演会と展示解説を予定しています。併せてご来館下さい。

講演会 3月3日(日) 午後2時～4時 博物館講座室
「身近な水辺のいきものの世界」
 講師 日本ホタルの会副会長／東京都動物園協会理事 矢島 稔氏
3月23日(土) 午後2時～4時 博物館講座室
「水辺の自然誌—人と昆虫の関わり—」
 講師 学習院大学講師 小西正泰氏

展示解説 3月2日(土)・9日(土)・16日(土)・24日(日)
いずれも午後2時から特別展示室で行います。
入場無料

1996年度会員募集中

日本ホタルの会では、新規会員(1996年度)を募集しています。入会ご希望の方、ニュースレターをご購読なさりたい方は当会事務局までご連絡下さい。

本年度の会計報告は近日中にお知らせ致します。

会費更新の手続きはお早めに

日本ホタルの会の会費は年度制ですので、毎年3月で会費切れとなります。現在、1996年度会費の受付中です。同封の郵便振替用紙にてご送金下さるようお願い致します。

当会の活動は、皆様の会費によって成り立っております。引き続きご支援下さいますようお願い致します。

人里へのニュースレター 第5号 平成8年2月15日発行



編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集委員会

発行 日本ホタルの会

〒105 東京都渋谷区桜丘町12-8 渋谷コーポラス401
TEL 03-3463-9061 FAX 03-3463-4762

印刷 プリントランド・スガイ

〒239 神奈川県横須賀市津久井153
TEL0468(47)0301(代) FAX0468(47)0313
